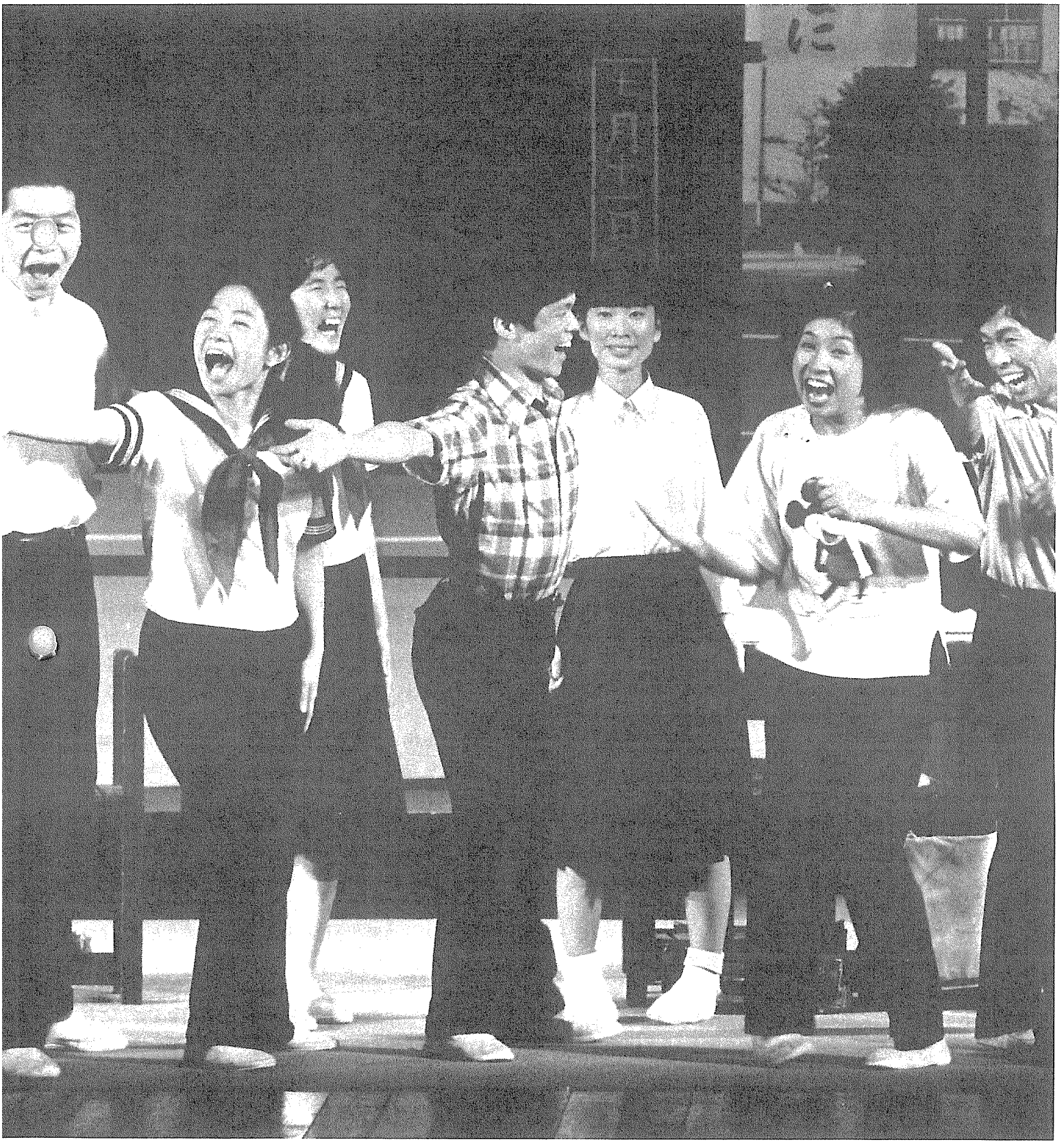
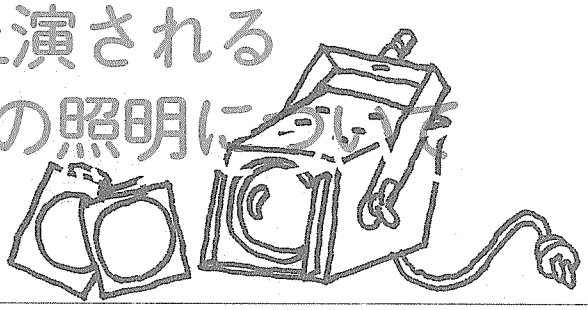
MARUMO LIGHTING NEWS

1979－3　VoL－32



「かげの砦」青年劇場提供

主に体育館などで上演される学校演劇、職場演劇の照明について



山内　晴雄

前号のライティング・ニュースで、「さんしょう太夫」の照明プランの作られるまでの過程を知り、又、一つの芝居に対する、アマチュア劇団の方と、専門照明家の照明プランの対比など、興味深かった事と思います。

それで今回は、殆んど設備のない体育館などで、お芝居をやるために少ない器材で、より効果的な照明を得るには、どんな配慮が必要か、という事を中心に考えてみました。

最近は、大ていの高校が、芸術鑑賞として年に一度位は、専門劇団を呼んで、演劇に親しむ機会をもつ様になりました。

しかしその場合は、何んかの専門家が、かなりの器材と技術を投入して作り上げるので、高校演劇、アマチュア演劇の場合はそれと同じものを望むのは、先づ無理な事が多いと思います。

それで、技術的な事に入る前に、演劇に於いて照明の果たさなければならない役割というものを、ざっとおさらいしてみましょう。(勿論、これは大ぜいの専門家が立派な本に書いていられますので、すでに御承知の事だと思いますが……)

舞台照明が果たさなければならない役割は、何と言っても「よく見える」という一語につきます。たゞ「よく見える」という事は、何時でもピカピカに明かるければ良く見えるかと言うと、そうとは限りません。

「良く見えるという事は、飜訳すると、劇の内容が、「良く観客に伝わる」という事と同義語だと考えて下さい。

さて、その良く見せる、良く伝えるという機能を充分に発揮するための、照明の具体的な働きを、いくつか項目的に並らべてみましょう。

1．自然の光の模倣、合成

これは、季節・時刻、天候などの自然光をナチュラルに再現すると言うことです。又、室内シーンの電灯の下の状態を作るのもこの中に入ると思います。

2．時間の移り替り、これは更に大きく二つに分けられると思います。

ⓐ　日が暮れる、夜が明ける、晴れて来る、曇って来る、などの自然的な時間の推移。

ⓑ　追想、幻想、予想、など飛躍的な時間経過。

3．場所の移動、例えば前号の「さんしょう太夫」の様に装置が変らずに照明だけで、場面を変化させる事。

4．情緒、心理（戯曲の、或は登場人物の）の光による補足、強調。

5．クローズ・アップ、ズーム・イン的な強調、視点誘導。

6．舞台美術的な、スライド、ライト・パターン、エフェクト・マシンなどを使った、光に依る造形。

他にもいろいろ有りましょうが、まず以上の様な働きに依って、演劇を良く見せる事ができると思います。そして、これらの働きをするためには、具体的にどんな技法を使ったら良いのかと言う事は、紙数が余ったら詳しく考えてみましょう。

たゞ、どんな技法を使うにしろ、基本的には、光の、「明るさ」「色彩」「角度」この三つを組み合わせる事に依って、これらの働きは作り上げられるものだと言う事です。

いよいよ、本題の設備が何もない体育館などで、これらの働きをするためにどうしたら良いかを順を追って考えてみます。

今、私達には、スポットライトが4台しかないとします。さあ、これを体育館のどこに設置しましょう？

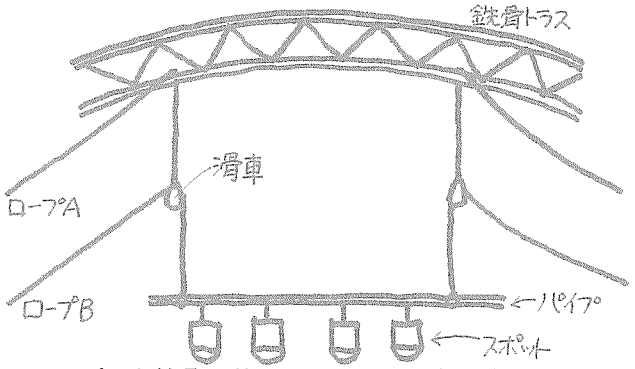
基本的な役割である「**良く見せる**」というためには、舞台の前面から、つまり観客側から照らす、という事はもちろんお分かりと思います。頭の真上からのサスペンションでもなければ、まして舞台の後方からのバックライトでもありません。

普通、最も良く取られるのが、体育館の両側にあるバルコニーを利用して、フロントサイドスポットとして左右、つまり、上手、下手に2台づつ取り付けて照らす事です。これは基本的に正しいのですが往々にして難点があります。それは、これらの場合、スポットから舞台が遠いために暗くなる事、又、位置が低いために、舞台の背景に、たくさんの人物の影が出て、登場人物を見にくくする事などがあるからです。

そこで、もう一つは、いわゆる、シーリング・ライトの位置に設置する事です。舞台前にあるバスケットボールの巻き上げ式ゴールポストを利用したり、天井の鉄骨から、ロープをたらして、パイプ、又は竹竿などを結び、それにスポットを取り付けるのです。

専門劇団が学校公演などを行う場合、このシーリング・ライトを吊るために、皆、かなりの苦労をします。私達の若いころには、まるで、とび職の様に鉄骨を伝ってよじ登り、危険な軽業の果てにシーリング・ライトを吊って得意になったりしましたが、これは絶体におすすめしません。命あっての物種、いや、命あっての演劇です。

今私達が学校公演の時にやるシーリング・ライトの吊り方は下図の様なものです。

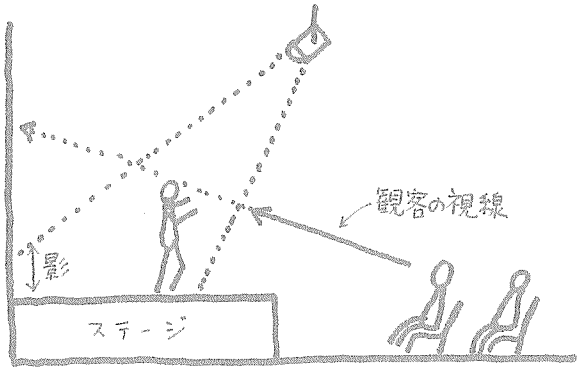


ロープAを鉄骨に引っかけるのが一番むずかしい訳ですが、低い天井なら、高い脚立を使ったり、高い時には、西部劇よろしく、ロープを投げてうまく通したりする達人も居ます。

ロープAの先端に大きな滑車をつけ、その滑車にロープBを通しておいて、ロープAを引きます。此の時、滑車が鉄骨に付くまで引き上げた方が、パイプのゆれが少なくなります。2本のロープBでパイプを吊り、そのパイプにスポットを取りつけ配線したのち、ロープBを引き上げて完成です。

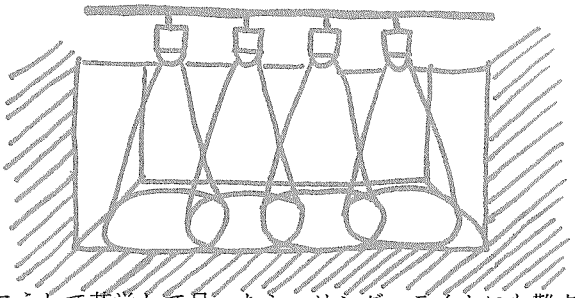
ロープA・Bは、体育館の側面のバルコニーの手すりなど、しっかりした所に固定します。

この様なシーリング・ライトの位置は、大ざっぱに言って、図の様な事でしょう。そして、その高さ、舞台からの距離は次の様な事を考えてきめられます。



つまり、

1．登場人物の頭の上まで充分光が当る。
2．人物の影が背景の高い所に迄出来ない高さ。
3．ステージの真上に近くなりすぎて、人物の顔などに上からの光りに依る影が、きつく出ないだけの距離。
4．例えば、4台のスポットの場合でもその光の輪が、演技いっぱいにひろがり、切れ目が出来ない距離等です。



こうして苦労して吊ったシーリング・ライトにも難点があります。それは場面に応じて、カラー・フィルターの交換が出来ない、という事です。

そこで、4台のスポットでシーリング・ライトを設けるか、フロント・ライトを設けるかを決定するのは、戯曲であり、又演出との関連です。

こゝで、更に4台のスポット・ライト、つまり合計8台あったとすれば、全幕を通じて、利用できるフィルターを入れた、シーリング・ライトを吊り、各場に適したフィルターを入れるフロント・ライトを設けるという事で、ほゞ基本的な照明になることでしょう。

そして、フロント・ライトに入れるカラーフィルターは、もし自然光ならば、キイ・ライト（朝日、夕日、など）は、前号で薄井さんが書かれた様に、演出上、戯曲上、登場人物に良く当たる、つまり良く見せる側に入れることが大切です。

こうして、スポットライトの数が多くなるにつれて、ふやしていく順序も、劇内容に依って、サスペンション・ライト、ステージスポット、バック・サス、特定の人物、又は場所を狙った単独のサスペンション・スポットという様に選択されるべきで、何が三番目、何が四番目という様に原則は立てられません。すべて、戯曲、演出、舞台条件によって決める事が重要な事です。例えばサスペンション・ライトは、舞台の床を照らして演技面を明るくするだけでなく、登場人物の肩口とか、頭の髪などにアクセントをつけ立体感を強め、その事に依って、人物に深みを、ひいては演じられている劇に深みを与える事ができます。或いは、バックライトを強調し、前からの光を少し押さえることで、意図的に悲壮感、絶望感、或いは希望という様な物まで観客に伝える役割を果たします。

初めの方に書いた、「良く見せる」イコール「良く伝える」という原則から言えば、或る場面では前からの光が全くなくて、後からのバックライトのみである方が、その場の劇内容を良く観客に伝えるとすれば、それが、「良く見せる」照明という事になります。（まあ、極端な例ですが）たゞ高校演劇など、器材が少ないのに、或る一瞬のシーンの為に一台のスポットを使ってしまうかどうかを決めるのは、かなり突き詰めた選択が必要な事を重ねて強調しておきましょう。

こうして、あちこちに配置されたスポットライトは、出来得る限り、延長コード等を使って一箇所に集めて一つの電源で点灯しましょう。いくら、配役に付いていない演劇部員が大勢居るからと言って、あちらのコンセント、こちらのコンセントから電源を取って点灯したのでは、例えば一幕の終りに照明がすべて消える、などという場合、いかに気心の通じ合った仲間と言えども、サイボーグではないので、感性、運動神経には、微妙な違いが有り、舞台の照明が、バラバラに消える、という様な醜体を演じることはまず確実ですから。

次に大切なのは、色、カラー・フィルターの選択です。時々見せてもらう、学校演劇の場合、大体共通しているのは、濃すぎる色を使っている事が多い様です。例えば、「夜の屋外、月も星もない闇夜」などという設定で、せっかく取り付けたスポット・ライトに全部、72番などというフィルターを入れたとします。

確かに闇夜にはなるでしょうが、それでは肝心の演技がまるっきり見えないという事になります。それは極端だとしても、例えば戯曲のト書きに「夕日が赤い」と書いてあるというので、「赤、赤、赤、あゝ24番にしよう」という様な例は無きにしも非ずです。

少ない照明器具で頑張る場合、欲しい色よりも、一段階、二段階うすい色、つまり明るい色を使うという様にセーブするのも大切だと思います。更に、外光の遮断の悪い体育館などの場合、昼間の公演と、夜の公演とでは色の選択にも違いがあって良い筈です。

荒けずりですが、今まで書いて来たような事を多少なりとも念頭において照明設計をしていただけば、すくない器材で少しでも「良く見える」舞台照明になるのではないかと思います。

さて、まだ紙数があるようですから、初めの方で書いた、照明の働きを項目順に少し詳しくどうやるかなどを考えてみましょう。

1．自然光の模倣、合成

これは、皆さんが一番数多く用いられる場合ですから、そう詳しく述べる必要はないと思います。例えば夜の場面ならホリゾント・ライトは、72番、71番、等の色で染め、演技面は、明るいブルー、78番、65番etc……。又、夕日ならば、35、31、37番など、その中からどの色を使うかは、これもしつこい様ですが、戯曲内容、演出、装置とのかね合いできめる事が必要です。

又、いくら忠実に自然を模倣すると言っても、限度がありますし、必ずしも忠実が演劇的にも正しいとは言えません。

例えば、夕日として、下手のフロントスポットに、35番を入れたとして、「ハイ、夕日は一方からしか来ないから、これで正しいです」では舞台照明はなり立ちません。特に片側からの光のみで、劇内容を強調したい場合の他は、反対側、上手からの光もなければ、観客は視覚的に

疲れてしまいます。

その場合、上手のフロントスポットに、例えばライト・ブルーとか、ブルー・グリーンを用いると夕日の方向性がはっきりしますし、下手と同じ、色、(つまり夕日色)を、明るさを少し落として、使えば、夕日とその反映が舞台に満ちあふれた感じになるでしょう。

同じ様に、室内の電灯シーンで、「電灯は頭の上に点いているから」と言って補助光線も、真上のサスペンション・スポットだけでは、観客からは人物の表情などが良く見えません。一台しか使えないのなら、むしろ、先程苦労して吊ったシーリング・ライトの位置から照らす方が理想的と言えましょう。

2. 時間の移り替り、の表現

ⓐ自然的な時刻の推移

これも、比較的ひんぱんに、皆さんが用いていると思います。先程の夕日の光をだんだん弱くすることに依って、「日が暮れる」或いは、なま(フィルターを入れない)スポットがだんだん明るくなって来ることに依って「朝になる」等です。

たゞ此の場合に気をつけることは、夕日、朝日以外のホリゾントライトや、もし吊れたならばサスペンションライトの地明りも、全体のバランスを考えて調節して行くこと。

又、自然は夕日が落ち切るのに30分かゝるとして、舞台でもそうしたのでは極端に言うと、芝居が終っても、照明だけは終らないと言うことになります。

変化時間を劇内容に合わせて圧縮してこそ舞台に於ける、忠実な自然の模倣と言えるでしょう。

又、この変化時を極端に圧縮する、例えば、人物が舞台でストップしている、十数秒、或いは数十秒の間に、照明が明かるい夕日から、月光の夜に変わる、と言う様な場合もあります。これは自然の模倣の凝縮であると同時に、次の、

ⓑ追想、幻想、予想、など飛躍的な時間経過の部類にも入っている事になります。

この表題を見るとどんなにむずかしい技法を使うのかと思われ勝ちですが、そうばかりとは限りません。例えば、室内の電灯シーンの照明が、数秒の暗転の後、朝の室内の照明にかわれば、翌朝とか、数日后の朝になりますし、まったく同じ電灯シーンの照明がふたたび点いたとしても、翌日、又は数日後の同時刻ということになります。有りがたい事に、と言うより当然演劇は、照明だけで演じられている訳ではありません。前後の劇の展開、人物のせりふなどで、観客には「あゝ、照明は同じだが、これは違う日だな」という事は伝わる筈です。

さて、「追想」です。例えば登場人物がせりふ等で「過去」を思い出して行くと同時に、単独に吊ったサスペンション・スポット、或はフォロー・スポットライトでその人物だけを残し、舞台全体の照明が暗転し、しかるべきキッカケで「過去」の情景の照明が点じられれば、観客は、容易に過去の世界に引きもどされるでしょう。

そして、その「過去の情景の照明」がナチュラルなものなのか、追想的な特殊な色、角度、明るさで構成されるのかはこれも戯曲、演出によって決められるべきで照明担当者の勝手なイメージ、「この照明の方が面白いから」などという遊び方発想で決める事は、慎しまなければなりません。

又、人物を一人スポットで残すことなしに、舞台照明を瞬時にチェンジして、過去、又は未来を形成する方法もあるし、現在と、その過去、未来の間に一定時間の暗転を置く事でも成り立ちます。

3. 場所の移動(場面の移動)

これもタイトルこそ違いますが技法的には、前項の時間と大差ない方法が用いられます。装置が全く変らない場合、照明のみの力で、室内から屋外へ、東京から田舎へと変えるのです。この場合、暗転時間を設けたり、オーバーラップしたりすることは装置による場面転換と同じ働きをすることですし、暗転中、舞台上の人物だけをスポット・ライトで残しておけば、観客には、その人物が、ＳＦ流に言うと、テレポートされた様な感じを与えるでしょう。

要するに同じ技法を使っても、変化した「場」の照明の作りと、劇の前後のつながりで、観客には、それが過去へのバックなのか、未来に対する空想なのか、違う土地への移動なのかは、識別できる筈です。そのためには照明が独走して、奇抜な光や、色彩的な美しさだけで構成すると誤解を与える危険があります。

4. 光に依る情緒、心理の補足、強調

此の項目は、細かく書くと、大変な量になるのでなるべく簡単にしましょう。しかしかなり大切な照明の役割の分野です。

例えば、様式的な演劇の場合、或る人物が怒り心頭に

発した時、一台のスポットに赤い色をかけ、その人物を強く照らしたとすれば、観客はその怒りを充分に感じ、なおかつ奇異な印象はうけないでしょう。しかし、リアルな劇の場合、照明がそこまでやると、全体のふんい気とちぐはぐになり、違和感だけが目立ったりします。どこ迄強く照らすか、どこ迄で押さえておくかと言う選択こそが照明の一番大切な組立ての基本だと思います。

「第二幕の幕切れの主人公はとっても淋しそうだったわねえ——」などと語り合って家に帰った観客一人が、その場面を、よくよく思い出してみたら、「あゝ、あそこで窓からうす赤い夕日が主人公に当たっていたわ、だから余計淋しく感じたのね」などというのも、立派な、と言うより、リアルな芝居の場合、より望ましい情緒、心理の補足、強調と言えるでしょう。

つまり、こゝでも劇内容、劇のスタイル、演出のイメージに依って、という繰り返し書いてきた前提を大切にして下さい。

そして、その際、いわゆる色彩心理学に余りこだわらないで下さい。赤は、情熱、怒り、の表現としても、「こゝはお国を何百里……」という歌の中の赤い夕日は淋しいものですし、人生に敗れた主人公にとって朝のすんだ日の光は、無残さを強調するでしょう。青い怒り、白い淋しさ、何だかメロドラマのタイトルみたいですが、そんな場合も劇の前後、のつながりの中では成り立つという事です。

もう一つ、技法的にはこんなやり方もあります。夜、電灯の下でぬい物をしながら夫の帰りを待つ妻に、同じ電灯の色による単独のスポットを当て、まわりの照明をゆっくりと半分位の明るさに落す、こんな事で、その妻の、孤独感が浮かび上がる場合もあります。

5. クローズ・アップ、ズームイン的強調

映画や、テレビでは或る人物を強調するためには、その人物を大写しにすることが出来ますが、舞台ではそうは行きません。

例えば、舞台に大勢の人物が居てどこに主人公が居るのか分らない。もしくは分っても印象が弱い、そんな場合全体の明かるさよりも、一段強い単独の光りを主人公に当てる。それに依ってクローズアップ的な感じになるでしょう。

「しかしそれでは困るんだ。主人公は此の場面では群衆の中の一人なんだから、だけどそこに居ると言うことだけはお客さんに分らせてくれよ」演出家がこんな注文を出したとします。さて、どうしましょう。例えばその場面の照明全体がフェイド・インする前に、主人公だけに当たる単独の光をほんの数秒間先行してフェイド・インさせ、追いかけて全体の照明が点いた時には単独の光は消してしまう。

そうすると主人公は皆と同じ光の中にまぎれてしまいますが、観客の目の隅には、意識の片隅には主人公が残っているでしょう。言ってみればズーム・イン的なやり方です。

6. 舞台美術的照明

この分野は近年いちじるしい発達をし、新しい器具もどんどん作られています。不勉強な私などとても追いつけない程ですが、値段も高かったり、多くの電気容量を必要としたりで、今日のテーマの様に体育館における上演などでは、なかなか使い切れないと思います。しかし、そこは工夫で、家庭のスライド映写機に作ったパターンを入れて写したりするのも又、面白い楽しい作業です(丸茂さんに営業妨害だって怒られるかな……)

これも、面白さに引かれて、上演される劇に不必要な程の使い方をしないような気配りは大切です。

一方、ホリゾントに写された雲のスライドなどは、(1)の自然光の合成の働きにもなるし、雲のパターンなどは、その形、色などをきびしく撰ぶことによって（4）の心理、情緒の補足強調にも役立ちます。つまり、(1)から(6)までとりあえず項目別に並べましたが、実はそれらが密接にからみ合って、お互いの役割を補い、果たすこと。これが舞台照明のトータルな形だと言うことです。

・　・　・

長々と下手な文章で書きつゞりましたが、実は私も、自分が書いたすべての事が出来る訳ではありません。自分にある程度納得の行く照明が出来上るのは、十回に一回あれば良い方です。まして、体育館などの悪条件の中では少しでも理想的な照明に近づく様何度でも試行錯誤をくりかえす事はしょっ中です。

ですから、何時の日か、あなたの学校に、私のプランのお芝居が行ったとして、『何だ、あいつえらそうな事を書いていた割には、あんな照明……』などと言わずに「他山の石、もって玉を磨くべし」の態度で見て下さい。

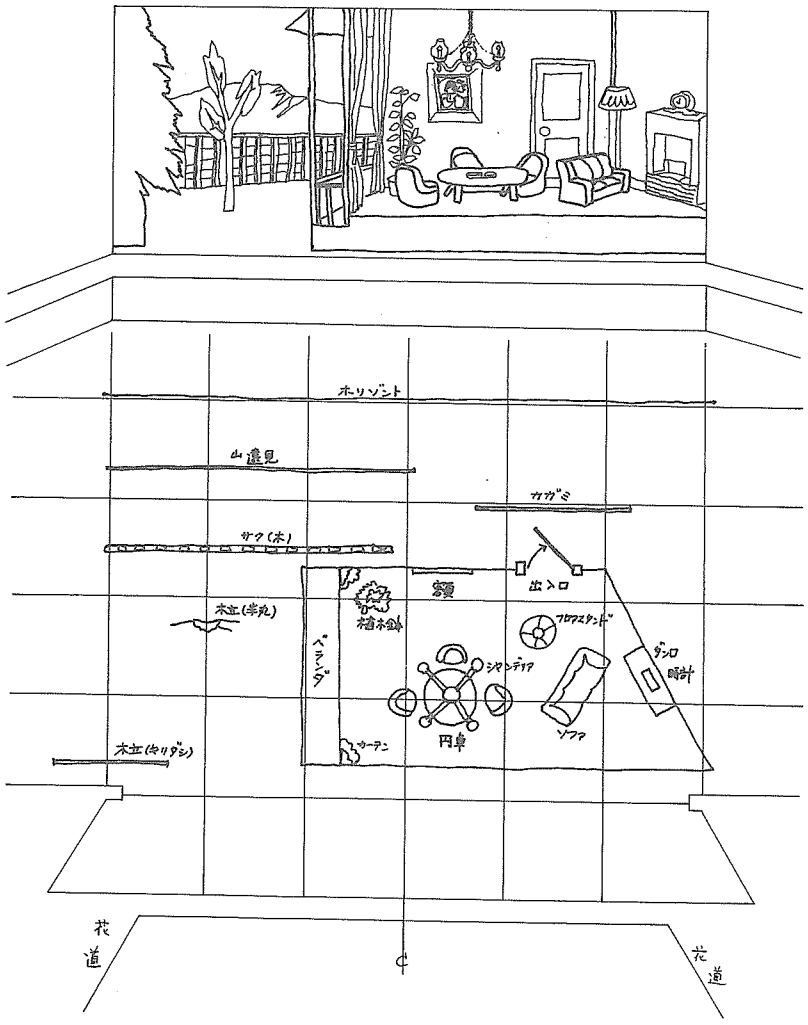
舞台照明 Q&A〈NO.2〉「寺小屋塾」紙上入塾

●前回は「おれたちの出会」（土屋弘光作）を素材にしてのＱ＆Ａでしたが、今回は〈小川昇舞台綜合研究室〉主催の「寺小屋塾」に紙上入塾してもらい受講者と同じように、プランを作ってもらうことにしたいと思います。

●その前に「寺小屋塾」について一寸紹介しますと、この「寺小屋塾」は毎月２回（原則として第２・第３土曜日に東京丸ノ内に新東京ビル 550室で開らかれています昨年の９月から始まって、この11月10日(土)17日(土)の講座で通算９回目になり約80人の方々が受講しています。授業内容は、第１日舞台照明の基本的なことから1)舞台照明の基本的役割、2)役割の分析・与える 光の役割がわからなければ照明は作れない。3)観客が無ければ演劇は成りたたない、第２日舞台照明の作り方の基本、1)舞台照明を作る、2)照明設備の役割、3)舞台照明の写実、4)光をデッサンする、5)例題による照明の研究と解説、とわかりやすい授業が展開しています。

●それでは第２日目の「例題としての舞台照明の作り方研究」で出題された問題に、あなたもチャレンジして見て下さい。

●あなたの作ったプランと「寺小屋塾」の生徒が作ったプランと小川昇先生のプランとを比較検討し、さまざまな問題を拾い出しもう一度作り直すのも良いと思います。



〈例題としての
舞台照明の作り方研究〉

テーマ

●この舞台は中流家庭の居間です
（のつもりです。）

＊

1．①昼間の場合
②夜の場合（スタンドとダンロを使う）

以上のいずれか一つを設定して、ストーリーを考え、明りを作って見て下さい。

＊

2．奥のドアは人物の出入りがあるものとします。

3．ベランダの出入口には、厚手のカーテンとレースのカーテンが使われています。上手に生かして下さい。

Q 生徒Ⅰの照明プラン

時＝初秋　　所＝郊外の閑静な住宅地

〈設定①〉初秋のある朝より午前11時頃までA氏（父親）の一人娘が嫁に行く日である。

シーン①L.O カーテンが閉っている。シーンと静まりかえっている。一人娘が歯ブラシをくわえて登場。カーテンを開ける。

シーン②父親登場。新聞を抱えている。部屋が暗いのでシャンデリア点灯。娘引っこむ。父親新聞を読むが、上の空である。ベランダより庭に降りる。

シーン③母親登場。シャンデリアを消す。

シーン④娘の花嫁姿（ウエディングドレス）を囲んで3人。娘別れのあいさつをする。

シーン⑤娘の忘れていった花束を残して室内無人になる。娘が取りに来て再び無人。

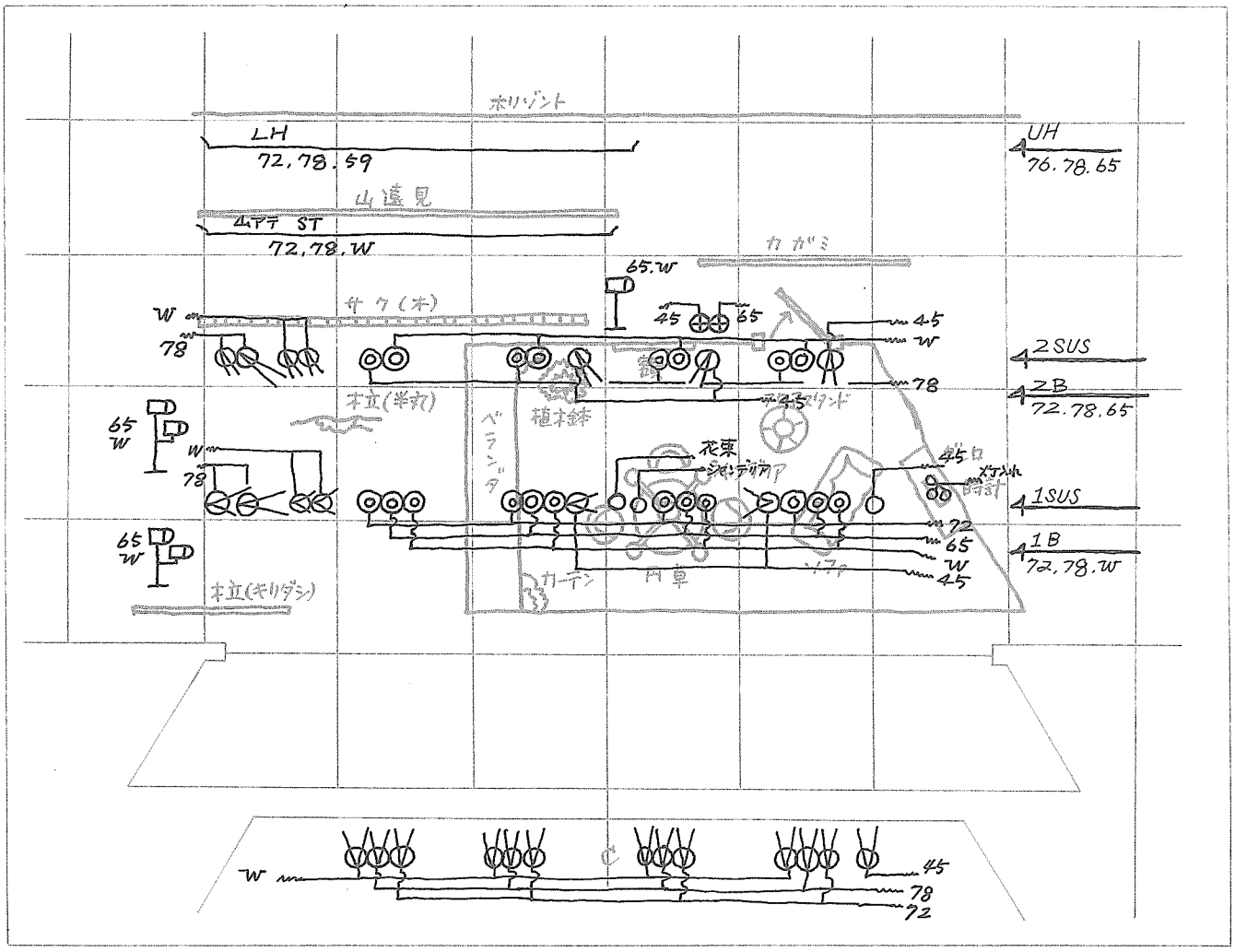
〈設定②〉同じ日の夜。とっぷりとくれて、淡く月光がさしている。結婚式の帰り。親せきや娘の友人達が集まってのパーティ。

シーン⑥シャンデリアが輝めき、口々にお祝いの言葉がとびかう。

シーン⑦次々に客が帰り、母親が後片づけにかかる。父親が声をかけて、いたわり、後片づけを止めさせる。

シーン⑧シャンデリアを消し、フロアスタンドをつけて、ダンロの前のソファに二人座る。ダンロの火がパチパチと燃える。

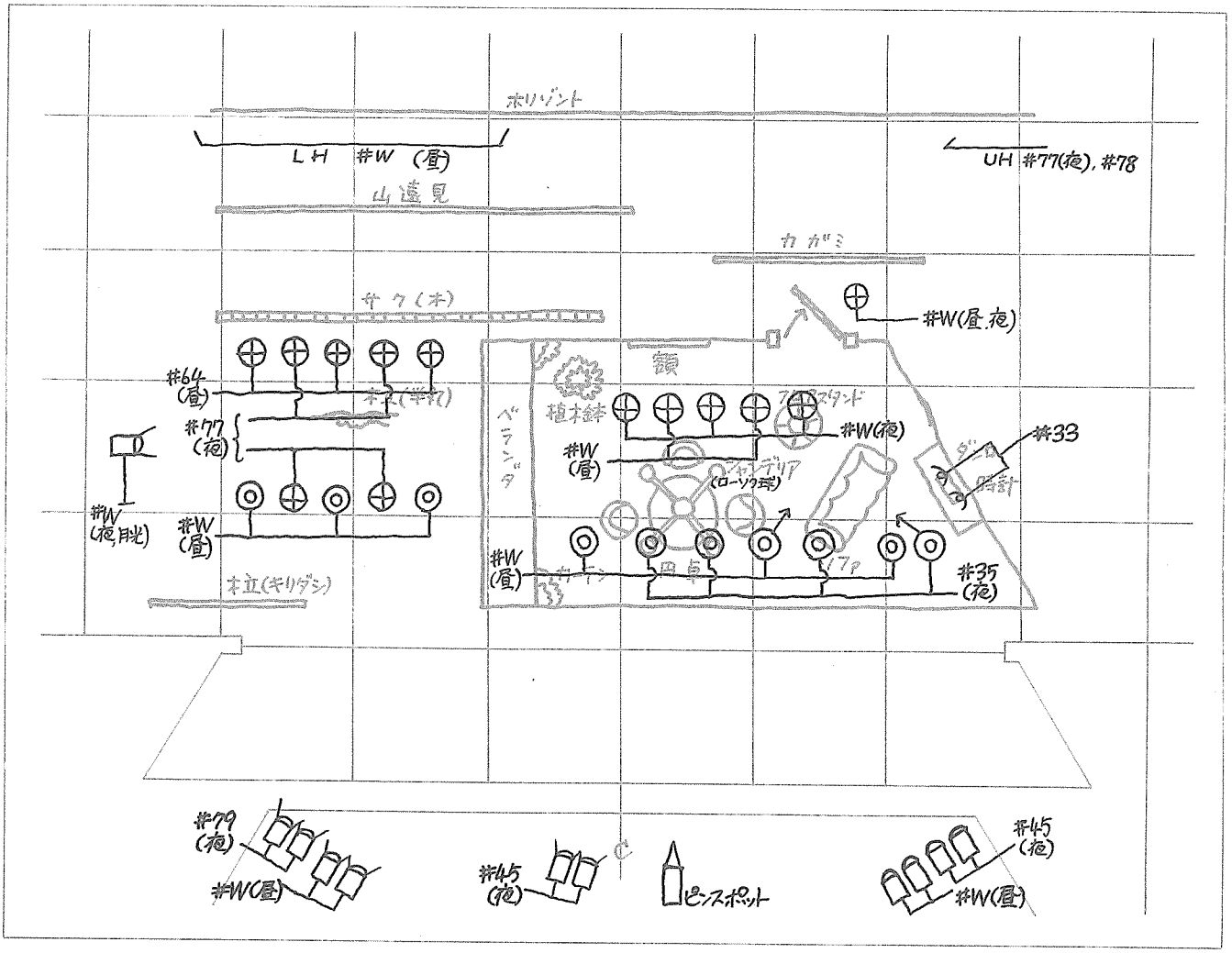
シーン⑨二人でシャンペンを飲みながら、じっとダンロの火を見つめる。　L.C.



●生徒Ⅰの Q シート（部分）

	Ciel W	Ciel 45	Ciel 78	Ciel 72	1B 72	1B 78	1B W	1Sus W ×2	1Sus 65 ×2	1Sus 72 ×2	1Sus W ×2	1Sus 78 ×2	花壇 W ×1	シャンデリア	1Sus 45 ×1	2B 72	2B 78	2B 65	2Sus 78	2Sus W	2Sus 45 ×2	2Sus 45 ×1	2Sus 78 ×2	2Sus W ×2	UH 76	UH 78	UH 65	LH 72	LH 78
① L.O	↗		↗	↗	↗	↗	↗	↗	↗	↗		↗				↗	↗	↗	↗	↗			↗	↗	↗	↗	↗	↗	↗
② シャンデリアつく 庭に出る	↘	↘	↘	↗	↗	↗	↗	↘	↘	↗	↘	↗		↗ 5-1		↗	↗	↗	↗	↘	↗		↗	↘	↗	↗	↗	↗	↗
③ シャンデリア消す									↘					↘							↘								
④	↗	↗	↗	↗	↗	↗		↗	↗	↗	↗	↗	↗			↗	↗	↗	↗	↗			↗	↗	↗	↗	↗	↗	↗
⑤	↘	↘						↘	↘		↘		↓							↘				↘					
⑥ L.O		↗	↗	↗	↗	↗				↗		↗	↗	↗	↗	↗	↗		↗		↗		↗		↗	↗		↗	↗
⑦																					↘				↘		↘		
⑧			↘			↘						↘		↘ 5-2			↘						↘		↘		↘		
⑨			↘			↘						↘					↘						↘		↘		↘		

Q 生徒Ⅱの照明プラン



〈設定〉
場所 ―― 或る山麓の中流住宅
時 ――― 12月上旬頃
天候 ―― 晴天

昼間（10時頃）
子供達（２人）は学校へ。妻、掃除・洗タクを終り、円卓中央のイスに掛けて休んでいる。
部屋のベランダ側窓には、レースのカーテンが引いてある屋外は晴天。空は青く澄みわたり、山は遠見ながら、クッキリと。陽光はレースのカーテンを通して、部屋のほぼ中央当りまで射している。
屋外は、フラットに明るく、屋内ダンロの辺はやゝ薄暗くする。

夜（９時頃）
屋内、ダンロの火が赤くもえている。スタンドが点灯されている。円卓の上のシャンデリアも点灯され、妻、子供（２人）が、トランプに興じている。主人はソファーで新聞を読んでいる。背中をダンロの赤い火がてらしている。
屋外、月の光で結構明るい。月光は窓迄射しているが、部屋のカーテンが引いてあるので屋内まで入らず、厚手のカーテンが、やゝ明るいていど。

A 塾長案

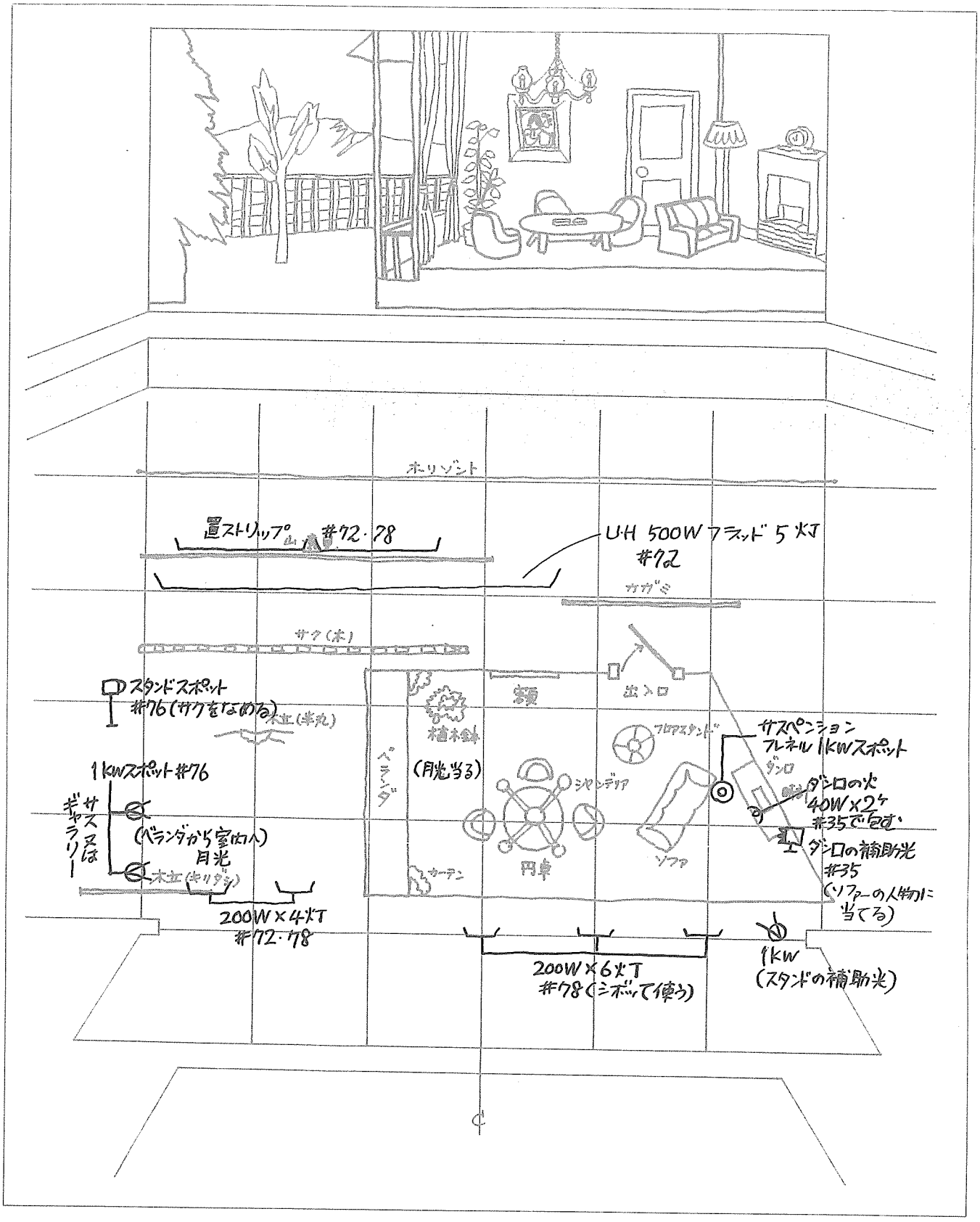
〈備考〉
1．脚本が無くて照明のプランを作ることは無理である。この場合はプランナーがこの場面を用いて或る劇の一部を想定して、その場の情景描写に重点を置いた照明を作らなければならない。
2．セクションの１升を２平方メートルと仮定する。
3．家具等の寸法は縮尺に拘わらない。
4．この家の在る場所は都会の中ではなさそうだ。山に雪が見が見えるから、季節は初冬か、或は初春の残雪とも考えられる。そのいずれかによって庭の立木の種類や葉の様子が決められるであろう。
5．先づプランを作るための卜書きを作る必要がある。卜書きをしっかり作れば自から情景が浮んでくるものである。

●夜の場合
シャンデリヤは消えている。フロアスタンドがついている。ダンロがあかあかと燃えている。ソファで一人の人物が静かに本を読んでいる。
外は月光で明るく、室内は射し込んだ月の光でほのかに明るい。

※作る時の注意
スタンドの光は、人物に対して後ろからになるので、人物の顔に当る光はダンロの火の明るさである。しかし、それがあまり強すぎることは好ましくない。
スタンドの光の方向性を失わない程度に前方からのサスの光で補助する。
屋外の月明りがあまり明るすぎると室内の情景とのバランスがくずれるから注意すること。
注）この場合前方（プロセニアムの外）からの光は不用

劇団だより ――青年劇場

今年で創立15周年を迎える青年劇場は、「真夏の夜の夢」をはじめシェクスピアの喜劇の躍動的な舞台で出発して以来一かんして、中学、高校生の演劇鑑賞、演劇活動とのかかわりを大切にし、教育現場との緊密な関連を持ちながら青少年劇場活動として多くの作品を上演してきました。最近では障害児学級を題材にした小寺隆韶作、堀口始演出「かげの砦」が、全国で好評のうちに五百数十回の公演を重ね、昨年末には、一般公演として上演された飯沢匡作・演出「夜の笑い」とともに紀伊国屋演劇賞を受賞しました。この二作品とも全国各地で継続上演中ですが、新しい作品として福田紀一原作、瓜生正美脚本・演出「ホヤわが心の朝」が、今春の初演以来、全国の中・高校生の心をつかみ、笑いと涙の渦をまき起こしながら上演をつづけています。
「ホヤわが心の朝」は――東大入学を目指すエリート大井貴美が突然、醜悪な外貌の海底動物「ホヤ」に変身。そこで入学した高校は“落ち゛ぼれ校”とのうわさも高い倒産寸前の日和学園高校……。はじめはつまはじきにしていた同級生たちの間で次第に人気ものになってゆく「ホヤ」。級友たちとの奇妙な交りが、かたくなな「ホヤ」の心をゆさぶりはじめる――といった物語りです。上演時間２時間20分。体育館での上演も可能です。


ホリゾント
置ストリップ #72・78
U.H 500W フラッド 5灯
#72
カガミ
サク(木)
スタンドスポット
#76(サクをなめる)
木立(半丸)
1kwスポット #76
サスペンションはギャラリー
(ベランダから室内へ)
月光
木立(キリダシ)
200W×4灯
#72・78
ベランダ
植木鉢
(月光当る)
窓
出入口
フロアスタンド
サスペンション
フレネル 1kwスポット
ダンロ
ダンロの火
40W×2ヶ
#35で包む
ダンロの補助光
#35
(ソファーの人物に当てる)
シャンデリア
円卓
ソファ
カーテン
200W×6灯
#78(シボッて使う)
1kw
(スタンドの補助光)
℄

価値あるものを残したい、それは卒業生の願い

時代は変わり、贈り物も変わる！

卒業記念の後輩たちへの贈りものは、単にモニュメントとしての記念品より、本当に後輩たちが活用できる品を選ぶ時代へと変わって来ていると言えましょう。照明器具は演劇部の活動をより素晴らしくするばかりでなく、それは学校生活の文化活動、たとえば講演会や入学、卒業式などの学園生活のセレモニーに欠かすことのできない必要器具となりつつあります。学園生活をより創造的に流出するのが照明器具と言えます。卒業記念の新しい価値ある贈りものとして照明器具を考えてみませんか！

※マルモへお問せください。皆さんの計画にあわせてご相談にのります。また、ご希望の方にはカタログをお送り致します。

●スポットライト CEC型　1,000W＋カラーホイル＋アイリスシャッター＋スタンド　1台　¥96,400

●ピンスポット EQ20型 1,000W＋カラーホイル＋スタンド　1台　¥163,900

●サスペンションライト DF型 500Wスポットライト＋ハンガー　1台　¥24,700

●T—1型　500Wスポットライト＋ハンガー　1台　¥18,700

●ボーダーライト BC型　100W×36灯 3 cir　1列　¥214,000

（取付費別）

●編集だより●

●みなさんとプロの照明家とをつなぐパイプ役として「マルモ・ライティング・ニュース」もこの号で32号になります。振り返ってみると、当初は細いパイプにすぎなかったのに、今はこんなに大きくなっている事を改めて考えますと感ひとしおです。大きくなった大きくなったと言って恵比寿顔ばかりもしておれません。充実した内容のある「マルモ・ライティング・ニュース」をお届け出来るようパンツの紐を締め直し再出発です。皆様のご意見ご希望を編集部にお寄せ下さい。

●前号でお知らせしました長野県北部地区高校演劇連盟主催の演劇講習会は160名の方々が参加し、中野高校演劇部による「キューポラのある街」の上演の後、入江洋祐、宮尾益美両講師によるメイキャップ、演技・照明についてのさまざまな指摘や指導がなされ収穫ある会でした。

●次号は東京演劇アンサンブルの「奇蹟の人」特集です。ご期待下さい。

●マルモでは創立60周年を記念して「MARUMO-LITING-FAIR 80 年代に飛翔する技術のすべて」をテーマに展示会を開催します。
展示する機器は記憶付調光装置ユニファイル・ワイヤレスコントローラ・新しい照明器具などいづれも操作実演致します。

東京会場　と　き　11月７日㈬８日㈭９日㈮10日㈯
ところ　丸茂電機(株)東京工場内展示場
大田区西糀谷３—37—７
京浜急行空港線大鳥居下車徒歩１分

大阪会場　と　き　11月14日㈯15日㈰
ところ　ＳＡＢホール（大阪フェスティバルホール地下）

名古屋会場　と　き　11月21日㈯22日㈰
ところ　御園座エメラルドホール

福岡会場　と　き　11月26日㈪27日㈫
ところ　福岡電気ビル展示室

札幌会場　と　き　12月４日㈫５日㈬
ところ　札幌市民会館　展示室

時間はいずれもA.M10：00～P.M４：00 15日のみA.M10：00～P.M３：00です。
皆様のご来場をお待ちしております。

●マルモライティングニュースは無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は丸茂電機㈱までお申し込みください。
なお、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

発行　丸茂電機株式会社
東京都千代田区神田須田町１—24
〒101　Phon (03) (252) 0321 (代)

このニュースは弊店からお届けします。